

装丁
久住和代

シユートを決めるように

— 佐藤修じょうしゅうの場合

赤羽あかほね
じゅんこ

夏休みが終わったばかりの九月四日、ぼくは並木図書館のソファでひろげた雑誌を見ながら、うとうとしていた。

「ねえ、ビブリオバトル、やらない？ 今、参加者を集めているの」とつぜん、声をかけられて、はっと背筋をのぼした。

「ぼく？ 呼んだ？」

「そうよ。あなたよ。シュウマイくん。あなた」

図書館の司書のクルミンはおかしそうに笑っていた。ぼくはどうしたらいいかわからず、頭をかいた。今聞いたビブリオバトルって、なんのことだかまったくわからない。

「あそこ見て。あのポスター。わたしが描いたの。よく描けてるでしょ」

クルミンは、児童室のかべを指さした。たくさん重ねられた本の前に子どもが五人立っている絵。その上に大きく「ビブリオバトル、やりませんか？」って書いてあった。

絵が得意なクルミンは、児童室の掲示物をまかされているらしく、おすすめ本の紹介や

ら、図書館の行事やら、いろんなことをポスターにしてよくはりだす。その中でも今回は力が入っていた。ビブリオバトルってところが、真つ赤な文字で浮きでるように書いてあって、遠くからでもよく目立つ。

「バトル？ バトルって戦ってこと？」

ぼくはポスターのほうに向かつて、歩きながらつぶやいた。

「ううん。戦いっていうか、ゲームなの。本を紹介しあうゲーム。とつてもおもしろいのよ」

ふふふって髪の毛をゆらしながら、クルミンは笑った。

「ええーっ。ぼく、そんなに本、読むほうじゃないよ」

手を顔の前でふった。

べつに、まったく読まないってわけではない。気にいったシリーズとかは読む。でも、サッカーボールを追いまわしたり、ゲームしたり、友だちと騒いだりするほうが、ずっと好きだ。

「そういう人がいいのよ。シュウマイくんは、ほら、元気じゃない。話すのも上手だし、目立つのも得意で、人前に出てあがらないでしょ。そういう人に、ぜひ、出てほしいの

よ。お願い」

クルミンは、手をあわせて、ぼくに頭をさげた。ぼくは「うーん」といつて、あとずさりした。

ぼくは佐藤修、小五だ。

シュウマイはニツクネーム。名前がしゅうだから、一年生からそんなふうに呼ばれている。ちなみに、食べ物シュウマイがすぐ好きってわけじゃない。餃子のほうがうまいって思う。けど、シュウマイって呼ばれるのは、悪くない。なんか、ぼくにぴたりって感じがする。うまくいえないけど、ステーキでも餃子でもラーメンでもなく、シュウマイ。なんか、ちょうどいいって感じなんだ。

で、ぼくがなんで並木図書館にいらかっていうと、ここが我が家のとおりだからだ。うちのエリさん（母親のことなんだけどね）、仕事で帰りが遅い日が多い。ひとり家でいるのがいやだと思うと、ぼくは、図書館に来る。ここで宿題をすることもある。

よく顔をあわせるので自然と仲よくなったのが、クルミン。児童室の司書さんで、本名は壇くるみ。だれがいいはじめたかわからないけど、みんなクルミンって呼んでる。ここでは一番しんまいだという二十代のクルミンは、年がはなれたお姉さんみたいで話しやすい。小さい頃から本が大好きだったから、がんばって司書の資格をとって、図書館に勤めているんだって。本の楽しさをみんなに広めたいって思っているらしい。

「ビブリオバトルは本のおもしろさをどれだけ言葉で紹介できるかを競うゲームなの。聞いているだけでも、十分に楽しめるけど、出るほうがおすすぬ。ワクワクドキドキの体験よ」

クルミンはぼくにチラシを一枚くれた。十一月三日（木曜日）、並木図書館の二階にあるホールで開催と書いてある。

「どんな本でもいいのよ。ほら、シュウマイくんが好きな図鑑でも写真集でもいい」

クルミンは、図書館のひとつの本棚を指さす。そこにある魚や動物の図鑑をよく見ていることを知っているんだ。

「でもね。少しルールがあるの。たとえば紹介する時間が五分間と決まっていることや、そのあと、観戦者からの質問に答えなきゃならないこととか。チラシの裏に書いてあるから、よく読んでね」

ぼくはチラシを裏返して、ぎっと目をとおす。細かい文字の中、二重線で囲まれている《チャンプ本》って言葉が目にとびこんできた。

「このチャンプ本ってなに？」

「ゲームだから一等を選ぶのよ。聞いた人が一番読みたくなった本に投票するの。今回は発表した人には後ろを向いてもらって、観客の人に手をあげてもらうのよ。それで多くの票が入った本がチャンプ本。選ばれるとそれはうれしいんだから」

ぼくはたくさん手があがるところを思いかべた。チャンプ本ってひびきは魅力的だ。

「じゃ、元気に話せば、チャンプ本とれる？」

「うーん。うまく話せればチャンプ本をとれるってわけでもないの。つつかえながら話しても、思いが伝われば、勝てることがあったりするのよ。しいていえば本の選び方が大事かな」

「本か……。チャンプ本をとるには、どうなのがいいのかな」

「こらこら、聞きだそうとして」

クルミンは、笑いながら軽くぼくをにらむ。

